

に言われたとの笑い話を聞いたことがあり、本土では多くの人々がすでに忘れはじめている風習・伝承を採録されていることに昔の記憶がよみがえるとともに、忘れられつつある石敢當のような風習の保存を博物館ではなく、日常においていつまでも保存したいものだと思った。

巻末、県別に掲載された全国社寺仏閣、神話伝説の伝承地一覧表を見ると、関西圏は別にして、東日本、九州、四国に点在する伝承地は全く知らない所も多く、ぜひとも訪れたい伝承地の多さにおどろいた。

この書はまさに全国の神話伝説の民間伝承地・史跡案内である。学会や余暇の旅行前に、一読すれば旅先の道指南（しるべ）になり、すばらしい旅の思い出となることにちがいない。一読をお薦めするとともに書架に置いていつでも繙けるようにしたい。

(奥沢 康正)

〔勉強出版、東京都千代田区麹町四一八—三六、電話〇三—五二一九〇二一、二〇〇三年一〇月一〇日、A五判、五六〇頁、七八〇〇円〕

太田 安雄 著

『太田雄寧傳』

本書は明治十年に創刊された東京医事新誌の創刊者太田雄

寧の伝記で雄寧の曾孫太田安雄氏（東京医科大学名誉教授、眼科学）の執筆である。著者宅には多くの資料、文献、参考書、写真などが保存されていたが、第二次世界大戦でその多くが焼失してしまった。しかし、肝心の東京医事新誌は創刊号から昭和十五年まで保存されており、残余の資料を収集され、本書の上梓が成った。明治期の医事雑誌を書誌学的に研究する者にとっては、得難い伝記である。

太田雄寧の略歴は、嘉永四年一月十八日武蔵川越の豪農滝島新右衛門長男宗貞の長男として出生、父は文久三年清水徳川家侍医太田昌意の後を継承する。雄寧は元治元年松本良順の蘭学塾に入門する。慶応二年幕府医学所に入門、明治五年軍医寮に出仕、同年十二月私費で米國留学し、ニューヨーク、フィラデルフィアの製薬学校で化学、製薬学を修学する。同七年帰国し愛媛県立医学校長となる。任期満了し東京に帰る。同十年二月二十五日医学専門雑誌「東京医事新誌」を創刊する。同十四年七月十八日ブライト氏腎臓炎で死去、享年三十一歳。

雄寧死去後、雄寧の蘭学の師松本良順が編集局長となって東京医事新誌は廃刊することなく、継続刊行された。本誌は昭和十五年戦時下の雑誌統制により、他誌と併合し、三一九八号より「日本医学及健康保険」に誌名変更し、同一八年「日本医学」に誌名変更、一時休刊となるが、同二十五年より東京医事新誌の復刊となる。同三十五年七十七卷十二月号をもって、編集発行人大島盛一の死去で後継編集人なく遂に廃刊

の運命となった。実に八十余年にわたる最長の医事雑誌として、後世にその名を刻まれた。

本書は十章からなり、前半は雄寧の生涯を区分して資料を交えて記述され、後半は日本医事新誌の刊行事情、太田家の系譜、雄寧の著書などについて記述されている。本書を一読し、筆者なりに関心を深めた一、二について述べると、著者が雄寧の米国留学中(明治六年)の肖像入り絵葉書を所持されていることであり、ぜひ機会をみて拝見したいと思つている。また、創刊号の表紙には「黒十字」がデザインされており、雄寧は赤十字のシンボルマークを米国留学中に知つて活用したものと推論されている。筆者は以前より日本における赤十字マークの使用由来につき関心があり、検索の結果明治五年十一月発行の京都療病院新聞第一号に病院旗に黒十字を使用する記述を知つており、日本医事新誌の表紙デザインとともに覚書として留めておきたい。また、本書に収載されている写真に松本良順と蘭疇舎の塾生、松本良順の還暦祝賀会と日本医学界の指導者達、太田雄寧の小照があり、いずれも大変鮮明で著者の許可を得て活用されうる貴重な資料である。

雄寧は短い生涯であつたが、多数の著書を遺している。薬物鑑法(明治八年)、新訂各国薬量一覽、独米局方一覽、原素一覽、袖珍分量考、薬舖心得草、温泉論、新式化学、看護心得、民間四季養生心得、獸類薬物学及獸類薬法書、薬物学大意、儒門医学などで米国留学の目的が窺われる。

本書は東京医事新誌の創刊事情を知る上で極めて貴重な伝記である。私家版の非売品であり、著者の好意に甘えて寄贈をお願いして一読されることを薦める。

(寺畑 喜朔)

〔雄寧会、東京都板橋区常盤台四一三二一二、電話〇三一九三七一九九三五、平成十五年八月三十一日、A五判、一五八頁、非売品〕

梶田 昭 著

『医学の歴史』

二〇〇三年秋に講談社学術文庫の一冊として世に出た(奥付での刊行日は九月一〇日)この注目すべき著作について、著者自身は何も語ることができない。それどころか、みずからは「序文」も「あとがき」も書くことが叶わなかった。

これらに代わつて、いま私たちが手にする本の巻頭には順天堂大学・医史学の酒井シツ教授の「推薦のこゝろば」(以下では仮に①と呼ばせて頂く)が、巻末にはさらに東京医科歯科大学教養部の佐々木武教授の「解説にかえてー思想史研究者の立場から」という文章(以下では仮に②)と、東京医科歯科大学医学部長で病理学の広川勝彦教授の「あとがき」(以下では仮に③)が加わっている。①と③は〇三年七月という日付を持っているが、これら三つの文章はこの著作の成立につ